奈良大学
研究助成概要報告

万葉文化論の展開

Cultural history of early Japan Based on the Manyōsyū

上野　誠*
Makoto Ueno

研究状況の認識

本研究は、以下の研究状況の認識に立って、立案・推進されたものである。従来の万葉研究は、いわば芸術論的な研究を中心にしていた。その芸術論の資料論となり得るのが、文献学であり、精緻な文献研究に立った作品鑑賞を行うのが、万葉研究であった、といえるだろう。その成果は、膨大な研究蓄積を産んでいる。

しかし、一方でその万葉歌を生み出した社会と歌表現との関係を論じる研究も出てきた。その一つが民俗学派であり、もう一つが歴史社会学派である。この二派は、対立するようにも見えるが、社会との関係を捉えるという点では一致している。歴史社会学や民俗学の成果を援用することによって、歌をそれを生み出した社会のなかで立体的に捉えようとする研究である。したがって、本研究のいう「万葉文化論」とは、歴史学や民俗学、考古学などの古代研究の蓄積を利用して、新しい万葉研究を切り開こうとするものである、といえるだろう。

研究の進捗

研究は、順調に進み、2003年6月までには文献調査、さらにはフィールド調査を重ね、すでに下記の研究業績を学会に問うことができた。口頭発表を行った美夫君志会、論文を発表した古代文学会はともに日本を代表する学会であり、上代関係のいわゆる四大学会の一つである。口頭発表審査、論文審査は激戦を極めたが無事合格となり、本研究の成果を学会誌に問うことができた。

〔個人発表〕発表題目：橡の解き洗ひ衣－譬喩と生活実感と－／発表機会：美夫君志会研究発表会／発表年月日：2005年1月23日／発表会場：中京大学

平成17年9月2日受理　*文学部国文学科教授

〔単著〕論文名：橡の解き洗ひ衣－譬喩と生活実感と－／論文掲載誌『古代文学』第44号／掲載誌発行者：古代文学会／出版年：2005年3月5日刊行／頁：1頁～11頁／種別：古学術雑誌

論文「橡の解き洗ひ衣ー譬喩と生活実感とー」の要約

本論文では、「譬喩歌」に見られる生活実感と表現との関係にスポットを当てて、検討することにした。

「譬喩歌」は、<話し手の主意><譬喩の媒体><譬喩する行為>のうち、媒体のみが表現されているものを「寓喩」と規定でき、寓喩歌として「譬喩歌」を理解することもできる。これを反転させ表現の方法の問題として見れば、〈媒体〉の裏に〈主意〉を隠し、聞き手ないしは読み手に気付かせる方法であるといえるだろう。つまり、「譬喩歌」はもともと、表現が二重構造になっているのであり、二重の像のうち隠されている方の像を享受者に気付かせる文芸なのである。その譬喩歌のなかに、「橡の　解き洗ひ衣」は、気の置けないホッとする存在であり、「若い愛人」に対する「古女房」をいう喩えがある。

衣に寄する

A　橡の　衣は人皆　事なしと　言ひし時より　着欲しく思ほゆ

B　凡ろかに　我し思はば　下に着て　なれにし衣を　取りて着めやも

C　紅の　深染めの衣　下に着て　上に取り着ば　言なさむかも

D　橡の　解き洗ひ衣の　怪しくも　ことに着欲しき　この夕かも

E　橘の　島にし居れば　川遠み　曝さず縫ひし　我が下衣

（譬喩歌　寄衣　巻7の1311～1315）

こうしてみると、傍線を施した衣が〈譬喩の媒体物〉であり、その裏に何らかの〈主意〉があることは容易にわかる。では、なぜ、それは容易にわかるのであろうか。一つは、「譬喩歌」「寄衣」と題詞に示されているからであろう。題詞を読んだ読み手は、隠されている〈主意〉を探ろうという目で見るし、衣が〈媒体物〉になっていることを前提で読むはずである。これは、編纂者が読者に示した配慮というべきものであろう。

もう一つの理由は、〈主意〉を導き出す補助線のようなものが、歌のなかに内包されているからであろう。この点について井手は、「譬喩歌」の「縁語」に着目している。「衣－着る」「衣－穢（な）る」の類縁関係が、婚姻関係を結ぶという〈主意〉を隠す<譬喩の媒体>となっていると述べている(波線部参照)。しかも、それは『万葉集』を紐解けば散見するほど固定的な関係である。だから、隠されている〈主意〉が、見つかりやすいのである。

このように見てゆくと、「譬喩歌」とは、〈主意〉を隠しておきながら、聞き手や読み手にそれを気付かせる文芸であるということができる。もちろん、〈主意〉はぼんやりと描かれるから、〈主意〉の解釈に揺れが生じてしまうのだが、そこにはある程度の許容範囲があらかじめ設定されていると見るべきであろう(実際これらの歌にも解釈がわかれているものがある)。し

かし、「譬喩歌」において大切なのは、聞き手や読み手が、想定される許容範囲のなかで、〈主意〉に気付くことである。つまり、「譬喩歌」は、〈主意〉の発見のさせかたに、表現の妙のある文芸なのである。また、聞き手や読者の立場からいえば、その発見を楽しむ文芸といえるだろう。

では、なぜそのようなことが可能なのだろうか。それは、〈媒体物〉の情報が少なくとも、表現者と享受者の間に共有されていたからであろう。筆者は、ここに「譬喩歌」において、生活世界が取り込まれる余地が存在すると考えている。それは、誰もが知っていて、経験したことがある事物や事柄が、〈媒体物〉としてはふさわしいからである。ところが、歌が歌われた当時においては、表現者と享受者が互いに共有していた生活体験や情報であっても、それが現在においては、体験しがたい場合がある。その場合には、それを知識として注釈で補う必要が生ずるのである。そういう観点から、橡の衣について、文献調査を行なった。その結果、以下のことがわかった。一つは安価で身近な染物であるという性格。もう一つは、色落ちしにくい、褪色しにくいという性格である。この二つの性格を持つがゆえに、「橡の衣」が、「若い愛人」に対する「古女房」という意味を持ち得るのである。つまり、長く連れ添うべき女を〈主意〉に持つ、と類推できるのである。そうして見ると、A歌の「事なし」との関係もきわめて明瞭となる。「事なし」は文字通り「事がない」のであろうが、諸注は知恵を絞って訳出している。「無事である」（沢瀉『注釈』・伊藤『釈注』）や、「無難のもの」（土屋『私注』）、さらには「気楽」（佐佐木『評釈』）などの解釈がそれである。どれも、許容の範疇に入るであろうが、妻とするに無難、長く連れ添うに気楽ということであろう。したがって、皆も言うように昔馴染みの女と再び過ごしたいと思うようなった、ということであろう。

D歌では、「解き洗ひ」との関係が〈主意〉を考える上で重要であろう。「解き洗ひ」はいうまでもなく洗い張りのことであるが、これは本格的な洗濯であり、家なる妹の労働である。したがって、「解き洗ひ」を着たいというのは家でくつろぎたい、妹との時間を持ちたいということなのである。その「解き洗ひ衣」が橡染めということは、「古女房」の喩えとなるであろう。宴席歌とすれば、今宵は「若い愛人」の宅ではなくして、「古女房」の家にしけこもうか！というバレ歌として機能するであろう。また、有名な「憶良らは・・・」の歌のように、出席者を笑わせておいて自らは先に退席する罷宴歌としても機能するはずである（巻三の三三七）。

本論文では以上のように、洗濯と染色に関わる「譬喩歌」を通じて、文芸に生活世界が取り込まれる契機を探ってきた。表現者と同時代の享受者の間に共有されていたであろう生活体験と生活知識が、「譬喩歌」の〈主意〉を発見する補助線となったりすることを、明らかにしたわけである。

現在、筆者が「万葉文化論」と題して模索しているのは、表現者と同時代の享受者の間に共有されていたであろう生活体験や知識、感覚などを明らかにすることである。それを歌の表現の側から逆照射する研究を今後も進めてゆきたい、と思う。

以上の点を踏まえて、本研究の成果を教育に還元してゆきたいと、考えている。